

貝塚茂樹編『古代殷帝國』（みすず書房、一九八四年）

甲骨學と殷墟發掘の概説書で、貝塚茂樹の編による、大島利一・伊藤道治・内藤戊申・白川靜・樋口隆康の共著。巻頭に、甲骨資料、殷の宮殿・墓の遺跡、出土資料の圖版を三〇頁にわたって収録し、巻末には文獻目録を載せる。本文は各執筆者が分擔の五章からなる。I「龍骨の祕密」（大島）では、清末に漢方で「龍骨」とよばれる龜甲獸骨から甲骨文字が発見された経緯と、その蒐集及び研究の發展を述べる。發見者の一人である劉鐵雲の『鐵雲藏龜』により起こった「龍骨ブーム」は、多くの學者を刺激し、孫詒讓・チャルファント・林泰輔らの論考が發表された。それらを受けた羅振玉や、その研究に攜わった王國維らによって中國古代史研究は飛躍的に進化した。彼らの苦心により、重要な資料であることがはっきりした甲骨やその出土した安陽の殷墟の學術的發掘とそれに伴ういっそう精密な研究成果が具體的にされるのがII「地上と地下」（伊藤）である。中央研究院の董作賓が発掘に派遣されて以降、發掘は大規模になり、参加人員も増加し、範圍も小屯だけでなく周邊地域にも調査が及んだ。これにより殷の文化は多くの文化の要素の影響を受けていることが明らかになり、墓葬群とその副葬品、建物の敷地あとや堅穴住居址、宗廟や社稷といった祭祀につかっていた青銅器などが發見された。そういつた殷人の日々の生活を甲骨文字から探るIII「殷人の日日」（内藤）は、「史記」に載せる紂王の話からはじまり、郭沫若『中國古代社會研究』、呂振羽『殷周時代的中國社會』など本書に引用する主な書物を解説する。その

後、甲骨文字をあげて殷代の氣候や動物、狩獵と牧畜、農業、天文歴法などについての各氏の論、音楽や車馬疾病などの卜辭を紹介する。

卜辭について更に詳しく述べるのはIV「卜辭の世界」（白川）で、真人集團の發見による分期や分派、殷王朝の成立から政治と社會までを書く。甲骨文は中國古代文化研究の第一資料であるが、當初から資料的價値が認められていたわけではなく、價値が見いだされたのちも幾度もの受難があった。そうしたなかで出された董作賓の「甲骨文斷代研究例」、『殷曆譜』の二編は、これらにおいて今日の甲骨學は語れない。最後のV「殷人の故郷」（樋口）では、解放後の中國考古學界の歩みをまとめる。中央研究院の資料の大部分は臺灣に移り、一方中國本土では中國科學院（現中國社會科學院）考古學研究所が発足し、解放前の業績を足場として安陽の發掘が再開された。同時に、各地における國家的な大規模な建設工事により、殷代の遺跡の分布がほぼ推定され、安陽の殷墟より古い殷文化の存在が明らかになった。これら殷の遺跡のひろがりや、殷文化の普及した範圍としてほぼまちがいない、龍山文化の範圍と比較的近いが、そこになかった大墓、銅器の存在こそが兩者を區別するものであり、殷文化を成立させた原動力といえるだろう。

（横大路綾子）